



(左) 冊子の表紙にもなった「ペガサスの結婚」2010年

**人々とのつながりが育む豊かな表現力と社会性**

空を飛ぶ牛、踊る三毛猫、海を飛ぶ鳥。市内に住む作家、大塚嶺さんの絵だ。マーカーやパステルで細部まで丁寧に描かれた動物たちが、幻想的な世界の中で笑っている。彼が描く絵は、どこかほのぼのとしていて、見る人の心を和ませる。

幼い頃から絵を描くことが好きだった嶺さんだが、5歳の頃、広汎性発達障害（自閉症）と診断された。人と目を合わせることに苦手で、会話能力の遅れが見られる。しかし、彼の作品が数々のコンクールで認められ、彼自身がアートを「窓」として

社会とつながると、心の声は表現力を増し、画用紙から溢れ出すほど多彩に成長した。

**言葉以上の言葉を伝える障害者アートの可能性**

人の心は目に見えない。だから、自分の興味や関心を、他人が読み取れる何かに変換し、相手の共感を得ようとする。互いの感性が合い、情報が伝われば、コミュニケーションとなる。

嶺さんの「ペガサスの結婚」という作品を、娘の門出を祝い、贈った親がいるという。嶺さんが、幸せを一途に願って描いたペガサスは、どんな言葉よりも「子を思う親」からのエールを新婦に伝えた。親と子、そして作者とのコミュニケーションを成立させる力があつたのだ。

感情や感覚を言葉で表現しにくい障害者にとって、見せたいものや見たいものを形にして伝える「創作アート」の可能性は大きい。そして、アートの前に「障害者」という前置きがなくても、見る人の琴線に触れる魅力的な作品も多い。

障害者が、アートの窓を通じて地域に出ていこうとする試みは、健常者中心の社会において、自立や共生に向けた、何らかの変化をもたらすかもしれない。



## アートは社会と通じる窓

## 創作が築く地域との関係

### 地域に育んでもらう

地元の公文教室でした。ビジネスとしての障害者教育ではなく「近所の子」として受け入れてくれたのです。嬉しさや安堵がいっぱいでした。

地域が息子を育んでくれる。そう感じてからは、少しでも彼の人が柄に気付けてもらえるよう、地元と積極的に関わろうと努力しました。小学校に通っていた頃は、担任の先生や周囲の保護者の理解を得ながら、地域の子どもたちとの交流を大切にしてきました。

地域とのつながりは、地元の皆さんが息子の展示会に訪れてくれることで実感します。息子にとって、絵

### 声 Voice

を描くことは、このまちに存在している証。見た人が「ほっ」とするだけでも、社会の一部として、役割を果たせるかもしれない。それが、彼なりの自立なんだと思います。

時間が掛かることですが「障害のある嶺くん」という第一印象を「あの絵を描いている嶺くん」と変えられるよう、これからも息子が人と出会い、結びつく機会を、見つけていこうと思えます。

おつかたけし  
**大塚健史さん** (父)  
まさこ  
**昌子さん** (母)

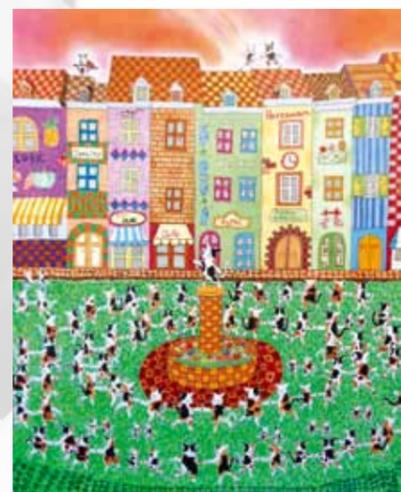


# 表現者 大塚 嶺

Ryo Otsuka

### 【おおつかりょうさん】

19歳。特別支援学校在学中に、大手不動産会社のアートコンクールに5年連続入賞。これまで企業の冊子などに、作品が多数採用された。今春から新人作家としての活動を開始。学校卒業後も、就労移行支援施設で職業訓練に励みながら、創作活動を続けている。



- ① 「海の空 つながる世界」2012年
- ② 「ミケネコタウン」2012年（部分）
- ③ 「いっしょに歌おう」2011年（部分／全体は13ページ）
- ④ 「ミケネコタウン」2012年